

森  
鷗外

カズイヌチカ





カズイスチカ



父が開業をしていたので、花房はなぶさ医学士は卒業する少し前から、休課に父の許もとへ来ている間は、代診まねごとの真似事をしていた。

花房の父の診察所はおおせんじゆ大千住にあつたが、小金井きみ子という女が「千住の家」というものを書いて、委くわしくこの家の事を叙述しているから、Lococitato ロコチタトとしてここには贅ぜいせない。Monet モネエ なんぞは同じ池に同じ水草の生はえている処を何遍も書いていて、時候が違い、天気の違い、

一日のうちでも朝夕の日当りの違うのを、人に味あじわわせるから、一枚見るよりは較べて見る方が面白い。それは巧妙な芸術家の事である。同じモデルの写生を下へ手に繰たり返されては、たまったものではない。ここらで省せい筆ひつをするのは、読者に感謝して貰もらっていも好いい。

尤もつともきみ子はあの家の歴史を書いていなかなった。あれを建てた緒方某は千住の旧家で、徳川將軍が鷹狩たかがりの時、千住で小休みをする度毎たびごとに、緒方の家が御用を承うわることに極きまっていた。花房の父がああの家をがらくたと一しよよに買かい取とった時、天井裏から長さ三尺ばかりの細長い

箱が出た。蓋ふたに御鋪物おんしきものと書いてある。御鋪物とは將軍の鋪物である。今は花房の家で、その箱に掛物が入れてある。

火事にも逢あわずに、だいぶ久しく立っている家と見えて、頗すこぶる古びが附ついていた。柱はしらなんぞは黒檀こくたんのように光あっていた。硝子ガラスの器うつわを載のせた春慶塗しゅんけいぬりの卓こや、白いシイツを掩おおうた診察用の寝台ねだいが、この柱と異様なコントラストをなしていた。

この卓や寝台の置いてある診察室は、南向きの、一番広い間で、花房の父が大きい雛棚ひなだなのような台を据えて、

盆栽を並べて置くのは、この室の前の庭であつた。病人を見て疲れると、この髯ひげの長い翁おきなは、目を棚の上の盆栽に移して、私ひそかに自らたのし娛むのであつた。

待合まちあいにしてある次の間には幾ら病人が溜たまつていても、翁は小さい煙管きせるで雲井を吹かしながら、ゆっくり盆栽を眺ながめていた。

午前に一度、午後に一度は、極まつて三十分ばかり休む。その時は待合の病人の中を通り抜けて、北向きの小部屋に這入はいつて、煎茶せんちやを飲む。中年の頃、石州流の茶をひきちやしていたのが、晩年に国を去つて東京に出た頃から碾茶



を止めて、煎茶を飲むことにした。盆栽と煎茶とが翁の道楽であった。

この北向きの室は、家じゅうで一番狭い間で、三畳敷である。何の手入もしないに、年々宿根が残っていて、秋海棠しゅうかいどうが敷居と平らに育った。その直ぐ向うは木槿もくげの生垣いけがきで、垣の内側には疎まばらに高い棕櫚しゅろが立っていた。

花房が大学にいる頃も、官立病院に勤めるようになってからも、休日に帰って来ると、先まずこの三畳で煎茶を飲ませられる。当時八犬伝に読み耽ふけっていた花房は、これをお父うさんの「三茶の礼」と名づけていた。

翁が特に愛していた、が蝦蟇出までという朱泥しゆでいの急須きゆうすがある。わたり径二寸もあるうかと思われる、小さい急須たいしやいろの代赭色はだえの膚ペンフィグスに Pemphigus という水泡すいほうのような、大小種々の疣いぼが出来ている。多分焼く時に出来損ねたのである。この蝦蟇出の急須に絹糸きりくずの切屑のように細かくよじれた、暗緑色の宇治茶を入れて、それに冷ました湯を注ついで、暫しばらく待っていて、茶碗ちやわんに滴たらす。茶碗の底には五立方センチメートル位の濃い帯緑黄色の汁が落ちている。花房はそれを舐なめさせられるのである。

甘みは微かすかで、苦みの勝ったこの茶をも、花房は翁の

微笑と共に味わって、それを埋合せにしていた。

或日こう云う対坐の時、花房が云った。

「お父うさん。わたくしも大分理窟だけは覚えましたが、少しお手伝をしましょうか」

「そうじやろう。理窟はわしよりはえらいに違いない。むずかしい病人があつたら、見て貰おう」

この話をしてから、花房は病人をちよいちよい見るようになったのであつた。そして翁の満足を贏<sup>か</sup>ち得ること  
も折々あつた。

翁の医学は フウフェランド

**Hufeland** の内科を主としたもので、その

頃もう古くなって用立たないことが多かった。そこで翁は新しい翻訳書を幾らか見るようにしていた。素とフウフェランドは蘭訳らんやくの書を先輩の日本訳の書に引き較べて見たのであるが、新しい蘭書を得ることが容易たやすくなかったのと、多くの障碍しょうがいを凌しのいで横文おうぶんの書を読もうとする程の氣力がなかったのと、昔読み馴れた書でない洋書を読むことを、翁は面倒がって、とうとう翻訳書ばかり見るようになったのである。ところが、その翻訳書の数かずが多くないのに、善い訳は少ないので、翁の新しい医学の上の智識には頗すこぶる不十分な処がある。

防腐外科なんぞは、翁は分っている積りでも、實際本  
 当には分からなかった。丁寧に消毒した手を有合ありあわせの手て  
 拭ぬぐいで拭ふくような事が、いつまでも止まなかった。

これに反して、若い花房がどうしても企て及ばないと  
 思ったのは、一種の Coup クウ d'œil ドヨイユ であつた。「この病人  
 はもう一日は持たん」と翁が云うと、その病人はきつと  
 二十四時間以内に死ぬる。それが花房にはどう見ても分  
 からなかった。

只これだけなら、少花房が経験の上で老花房に及ばな  
 いと云うに過ぎないが、実はそうでは無い。翁の及ぶべ

からざる処が別に有ったのである。

翁は病人を見ている間は、全幅の精神を以て病人を見ている。そしてその病人が軽かろうが重かろうが、鼻風だろうが必死の病だろうが、同じ態度でこれに対している。盆栽をも翫もてあそんでいる時もその通りである。茶を啜すすっている時もその通りである。

花房学士は何かしたい事若くはする筈はずの事があつて、それをせずに姑しばりく病人を見ているという心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だとなつまらなく思う。エントレッサンEntressantの病症でなくては厭あき足らなく思

う。又偶々たまたまいわゆる所謂興味ある病症を見ても、それを研究して書いて置いて、業績として公にしようとも思わなかつた。勿論もちろん発見も発明も出来るならしようとは思うが、それを生活の目的だとは思わない。始終何か更にしたい事、する筈の事があるように思っている。しかしそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物かが幻影の如くに浮んでも、捕捉することの出来ないうちに消えてしまう。女の形をしている時もある。種々の栄華へきがんの夢になつてゐる時もある。それかと思つと、その頃碧巖へきがんを見たり無門むもん関かんを見たりしていたので、禅定ぜんじょうめいた

コンタン普拉チーフ

contemplatif な観念になっている時もある。とにかく取留めのないものであった。それが病人を見る時ばかりではない。何をしていても同じ事で、これをしてしまって、片付けて置いて、それからというような考をしている。それからどうするのだか分からない。

そして花房はその分からない或物が何物だということ、強いて分からせようともしなかった。唯ただ或時はその或物を幸福というものだと考えて見たり、或時はそれを希望ということに結び付けて見たりする。その癖又それを得れば成功で、失えば失敗だというような処までは追



求しなかつたのである。

しかしこの或物が父に無いということだけは、花房も疾とつくに気が付いて、初めは父がつまらない、内容の無い生活をしているように思つて、それは老人だからだ、老人のつまらないのは当然だと思つた。そのうち、熊沢蕃山くまざわばんざんの書いたものを読んでみると、志を得て天下国家を事とするのも道を行うのであるが、平生顔を洗つたり髪を梳くしけずつたりするのも道を行うのであるという意味の事が書いてあつた。花房はそれを見て、父の平生へいせいを考へて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好いい

加減に済ませて行くのに反して、父はつまらない日常の事にも全幅の精神を傾注しているということに気が附いた。しゆくば宿場の医者たるに安んじている父の レジニアシオン *régignation* の態度が、有道者の面目に近いということが、おほろげ臃気ながら見えて来た。そしてその時からにわか遽に父を尊敬する念を生じた。

実際花房の気の付いた通りに、翁の及び難いところはここに存そんじていたのである。

花房は大学を卒業して官吏になって、半年ばかりも病院で勤めていただろう。それから後は学校教師になって、

ラボラトリウム しゅつにゆう Laboratorium に出 入するばかりで、病人というものを扱った事が無い。それだから花房の記憶には、いつまでも千住の家で、父の代診をした時の事が残っている。それが医学をした花房の医者らしい生活をした短い期間であつた。

その花房の記憶に僅かわずに残っている事を二つ三つ書く。一体医者のためには、軽い病人も重い病人も、贅沢ぜいたくを飲ぐすりむ人も、病気が死活問題になつている人も、均ひとしくいれ カズス casus である。 カズス Cusus として取り扱つて、感動せず、冷眼に視ている処に医者カズスの強みがある。しかし

花房はそういう境界には到らずにしまった。花房はまだ病人が人間に見えているうちに、病人を扱わないようになってしまった。そしてその記憶には唯 *Curiosa* クリオザ が残っている。作者が漫然と医者 of 術語を用いて、これに *Casistica* カズイステチカ と題するのは、花房の冤枉 えんおう とする所かも知れない。

落架風 らくかふう。花房が父に手伝をしようとして云ってから、間のない時の事であった。丁度新年で、門口に羽根を衝 つ いていた、花房の妹の藤子が、きやつと云って奥の間へ飛び込んで来た。花月新誌の新年号を見ていた花房が、なん

だと問うと、恐ろしい顔の病人が来たと言う。どんな顔かと問えば、只食い付きそうな顔をしていたから、二目と見ずに逃げて這入ったと言う。そこへ佐藤という、色の白い、髪を長くしている、越後生れの書生が来て花房に云った。

「老先生が一寸お出下さるようにと仰やいますが」  
 「そうか」

と云って、花房は直ぐに書生と一しよに広間に出た。春慶塗の、楕円形だえんけいをしている卓の向うに、翁はここにこした顔をして、椅子いすに倚り掛かっていたが、花房に「あ

の病人を御覧」と云つて、顔で方角を示した。

寝台ねだいの据ねえてあるあたりの畳の上に、四十しじゅう余りのお上かみ

さんと、二十はたちばかりの青年とが据ねわつてゐる。藤子が食

い付きそうだと云つたのは、この青年の顔であつた。

色の蒼白あおしろい、面長おもながな男である。下顎したあごを後下方こうかほうへ引つ張

つてゐるように、口を開あいてゐるので、その長い顔が殆ほとん

ど二倍の長さに引き延ばよだれされている。絶えず涎よだれが垂れ

るので、畳んだ手拭あじで腮あじを拭ぬいてゐる。顔位の狭い面積

の処で、一部を強く引つ張れば、全体の形が變つて来る。

醜みにくくはない顔の大きい目が、外眦がいさいを引き下げられて、

異様に開いて、物に驚いたように正面を凝視している。

藤子が食い付きそうだと云ったのも無理は無い。

付き添って来たお上さんは、目の縁を赤くして、涙声  
で一度翁に訴えた通りを又花房に訴えた。

お上さんの内には昨夜骨牌会があった。息子さんは誰  
やらと札の引張合いをして勝ったのが愉快だとい  
うので、大声に笑った拍子に、顎が両方一度に脱れた。それ  
から大騒ぎになって、近所の医者に見て貰ったが、嵌め  
てはくれなかった。このままで直らなかつたらどうしよ  
うというので、息子よりはお上さんが心配して、とうと

う寐ねられなかつたといふのである。

「どうだね」

と、翁は微笑ほほえみながら、若い学士の顔を見て云つた。

「そうですね。診断は僕もお上さんに同意します。両りょう

側下顎そくかがくだつきゅう脱臼だつぎゅうです。昨夜ゆうべ脱臼だつぎゅうしたのなら、直ぐに整復せいふくが

出来る見込です」

「遣やつて御覧ごらん」

花房は佐藤にガアゼを持って来させて、両手の拇指おやゆびを

厚く巻いて、それを口に挿さし入れて、下顎さを左右二箇所

で押えたと思うと、後部を下へぐつと押し下げた。手を緩ゆる



めると、顎は見事に嵌まってしまった。

二十の涎よだれ繰りは、今まで腮を押えていた手拭で涙を拭いた。お上さんも袂たもとから手拭を出して嬉し涙うれを拭いた。

花房はしたり顔に父の顔を見た。父は相変らず微笑んでいる。

「解剖を知っておるだけの事はあるのう。始てのようではなかった」

親子が喜び勇んで帰った迹あとで、翁は語ことばを続ついでこう云った。

「下顎の脱臼は昔は落架風と云つて、或る大家は整復の秘密を人に見られんように、大風炉敷おおぶろしきを病人の頭から被かぶせて置いて、術を施したものだよ。骨の形さえ知つていれば秘密は無い。皿の前の下へ向いて飛び出している処を、背後うしろへ越させるだけの事だ。学問は難有ありがたいものじやのう」

一枚板。これは夏のことであつた。瓶有村かめありむらの百姓が来て、せがれ倅が一枚板になつたから、来て見て貰いたいと云つた。佐藤が色々容態を問うて見ても、只繰り返して一枚板になつたというばかりで、その外にはなんにも言わ

ない。言うすべを知らないのであろう。翁は聞いて、丁度暑中休みで帰っていた花房に、なんだか分からないが、余り珍らしい話だから、往って見る気は無いかと云った。

花房は別に面白い事があるうとも思わないが、訴えの詞ことばに多少の好奇心を動かされなくてもない。とにかく自分が行くことにした。

蒸暑い日の日盛りに、車で風を切って行くのは、却かえって内にいるよりは好い心持であった。田と田との間に、堤のように高く築き上げてある、長い長いなわてみち暇道を、汗を拭きながら挽ひいて行く定吉に「暑かろうなあ」と云え

ば「なあに、寝ていたって、暑いのは同じ事でさあ」と云う。一本一本の榛ほんの木から起る蝉せみの声に、空気の全体が微かすかに顫ふるえているようである。

三時頃に病家に著とびらいた。杉の生垣いけがきの切れた処しに、柴折戸しおりどのような一枚の扉を取り付けた門を這入ると、土を堅く踏み固めた、広い庭がある。穀物を扱あう処である。乾き切った黄いろい土の上に日が一ぱいに照っている。狭く囲まれた処ふまに這入ったので、蝉の声が耳を塞ふさぎたい程やかましく聞える。その外には何の物音もない。村じゅうが午休ひつやすみをしている時刻なのである。

庭の向うに、横に長方形に立ててある藁葺わらぶきの家が、建具ことごとを悉くはずして、開け放つてある。東京近在の百姓家の常で、向つて右に台所や土間が取つてあつて左の可なり広い処を畳敷にしてあるのが、只一目に見渡される。

縁側なしに造つた家の敷居、鴨居かもいから柱、天井、壁、畳まで、*bitume*ビチュムの勝つた画のように、濃淡種々の茶褐色に染まっている。正面の背景になつて、濃い褐色に光っている戸棚の板戸の前に、煎餅布団せんべいぶとんを敷いて、病人が寝かしてある。家族の男女が三四人、涅槃図ねはんずを見たように、それを取り巻いている。まだ余りよごれていな

い、病人の白地の浴衣ゆかたが真白に、西洋の古い戦争の油画で、よく真中にかいてある白馬のように、目を刺戟しげきするばかりで、周囲の人物も皆褐色である。

「お医者様が来ておくんなされた」

と誰やらが云ったばかりで、起たって出迎えようともしない。男も女も熱心に病人を目守まもっているらしい。

花房うしろの背後うしろに附ついて来た定吉は、左の手で汗を拭きながら、提さげて来た薬籠やくろうの風炉敷包ふうろ敷包を敷居きわの際きわに置いて、台所の先きの井戸へ駈けて行つた。直ぐにきいきいと轆ろくの軋きしる音、ざっざつと水を翻こぼす音がする。

花房は暫く敷居しばらの前に立って、内の様子を見ていた。病人は十二三の男の子である。熱帯地方の子供かと思うように、ひどく日に焼けた膚の色が、白地の浴衣で引立って見える。筋肉の緊しまった、細く固く出来た体だということが一目で知れる。

暫く見ていた花房は、駒下駄こまげを脱ぎ棄てて、一足敷居の上こいに上がった。その刹那せつなの事である。病人は釣り上げた鯉こいのように、煎餅布団の上で跳ね上がった。

花房は右の片足を敷居に踏み掛けたままで、はっと思つて、左を床の上へ運ぶことを躊躇ちゆうちよした。

横に三畳の畳を隔てて、花房が敷居に踏み掛けた足の  
衝突が、波動を病人の体に及ぼして、微細な刺戟が猛烈  
な全身の痙攣を誘い起したのである。

家族が皆じつとして据わっていて、起つて客を迎えな  
かったのは、百姓の礼儀を知らない為めばかりではなか  
った。

診断は左の足を床の上に運ぶ時に附いてしまった。破  
傷風である。

花房はそつと傍そばに歩み寄つた。そして手を触れずに、  
やや久しく望診していた。一枚の浴衣を、胸をあらわし



て著ているので、殆ど裸体も同じ事である。全身の筋肉が緊縮して、体は板のようになっていて、それが周囲のあらゆる微細な動揺に反応して、痙攣を起す。これは学術上の現症記事ではないから、一々の徴候は書かない。しかし卒業して間もない花房が、まだ頭にそっくり持っていた、内科各論の中の破傷風の徴候が、何一つ遺れられずに、印刷したように目前に現れていたのである。鼻の頭に真珠を並べたように滲み出している汗までが、約束通りに、遺れられずにいた。

一枚板とは実に簡にして尽した報告である。智識の

私わたくしに累せられない、純樸じゆんぼくな百姓の自然の口からでなくては、こんな詞ことばの出ようが無い。あの報告は生活の印象主義者の報告であつた。

花房は八犬伝の犬塚信乃いぬづかしのの容体に、少しも破傷風らしい処が無かつたのを思い出して、心の中うちに可笑おかしく思つた。

傍そばにいた両親の交かわる交かわる話すのを聞けば、この大切な一人息子は、夏になつてから毎日裏の池で泳いでいたと  
いうことである。体中に掻かきむしつたような瘡きずの絶えな  
い男の子であるから、病原菌の侵入口はどこだか分から

なかつた。

花房は興味ある カズス **CASUS** だと思つて、父に頼んでこの病人の治療を一人で受け持った。そしてその経過を見に、度々瓶有村の農家へ、炎天を侵して出掛けた。おか 途中でひどい夕立に逢つて困つた事もある。

病人は恐ろしい大量の クロラアル **Chloral** を飲んで平気でいて、とうとう全快してしまつた。

生理的腫瘍。しゅよう 秋の末で、南向きの広間の前の庭に、木葉が掃いても掃いても溜まる頃であつた。丁度土曜日なので、花房は泊り掛けに父の家へ来て、診察室の西南にしみなみ

に新しく建て増した亜鉛葺トタンぶきの調剤室と、その向うに古いなつめ棗の木の下に建ててある同じ亜鉛葺の車小屋との間の一坪ばかりの土地に、その年沢山実のなつた錦荔枝れいしの蔓つるの枯れているのをむしっていた。

その時調剤室の硝子窓ガラスまどを開けて、佐藤が首を出した。

「一寸ちよつと若先生に御覧を願いたい患者がございますか」

「むずかしい病気なのかね。もうお父っさんが帰ってお出いでになるだろうから、待またせて置けば好いいじゃないか」

「しかしもうだいぶ長く待せてあります。今日の最終の患者ですから」

「そうか。もう跡は皆あとな帰みんなったのか。道理でひどく静かになったと思つた。それじゃあ余り待たせても気の毒だから、僕が見ても好い。一体どんな病人だね」

「もう土地の医師の処を二三軒廻つて来た婦人の患者です。最初誰かに脹ちようまん満だと云われたので、水を取つて貰うには、外科のお医者好かろうと思つて、誰かの処へ行くと、どうも堅いから癌がんかも知れないと云つて、針を刺してくれなかつたと云うのです」

「それじゃあ腹水か、腹腔ふくこうの腫瘍かという問題なのだね。君は見たのかい」

「ええ。波動はありません。既往症を聞いて見ても、肝臓に何か来そうな、取り留めた事実もないのです。酒はどうかと云うと、厭いやではないと云います。はてなと思つて好く聞いて見ると、飲んでも二三杯だと云うのですから、まさか肝臓に変化を来きたす程のこともないだろうと思います。栄養は中等です。悪性腫瘍らしい処は少しもありません」

「ふん。とにかく見よう。今手を洗つて行くから、待つてくれ給え。一体医者か手をこんなにしてはたまらないね、君」

花房は前へ出した両手の指のよごれたのを、かが屈めて広げて、人につか掴み付きそうな風をして、佐藤に見せて笑っている。

佐藤が窓を締めて引っ込んでから、花房はゆっくり手を洗って診察室に這入った。

例の寝台の脚あしの処に、二十二三の櫛くし巻まきの女が、半襟はんえりの掛かかった銘めい撰せんの半纏はんてんを着て、絹のはでな前掛むなだかを胸高に締めて、右の手を畳に衝ついて、体を斜にして据すわっていた。  
琥珀色こはくいそを帯びた円い顔の、目の縁ふちが薄赤い。その目でちよいと花房を見て、直ぐに下を向いてしまった。

クリアント

Ciente としてこれに対している花房も、ひどく媚こびのあ  
る目だと思った。

「寝台に寝させましようか」

と、附いて来た佐藤が、知れ切った事を世話焼顔に云  
った。

「そう」

若先生に見て戴いたくのだからと断つて、佐藤が女に再  
び寝台に寝ることを命じた。女は壁の方に向いて、前掛  
と帯と何本かの紐ひもとを、随分気長に解いている。

「先生が御覧になるかも知れないと思つて、さつきその



ままで待っているように云つといたのですが」

と、佐藤は言分けらしくつぶやいた。掛布団もない寝台の上でそのまま待てとは女の心を知らない命令であったかも知れない。

女は寝た。

「膝ひざを立てて、楽に息をしてお出いで」

と云って、花房は暫く擦すり合せていた両手の平を、女の腹に当てた。そしてちよいと押えて見たかと思うと「聴診器を」と云った。

花房は佐藤の卓の上から取って渡す聴診器を受け取っ

て、臍へその近処に当てる左の手で女の脈を取りながら、聴診していたが「もう宜よろしい」と云って寝台を離れた。

女は直ぐに着物の前を掻き合せて、起き上がろうとした。

「ちよつとそうして待っていて下さい」

と、花房が止めた。

花房に黙って顔を見られて、佐藤は機嫌きげんを伺うように、小声で云った。

「なんでございましょう」

「腫瘍は腫瘍だが、生理的腫瘍だ」

「生理的腫瘍」

と、無意味に繰り返して、佐藤は呆れたあきような顔をしている。

花房は聴診器を佐藤の手に渡した。

「ちよつと聴いて見給え。胎児の心音が好く聞える。手の脈と一致している母体の心音よりは度数が早いからね」

佐藤は黙って聴診してしまつて、忸怩じくじたるものがあつた。

「よく話して聞きかせて遣やつてくれ給え。まあ、套管針とうかんしんなん

ぞを立てられなくて為合せしあわだった」

こう云って置いて、花房は診察室を出た。

子が無くて夫に別れてから、裁縫をして一人で暮している女なので、外の医者にんしんは妊娠にんしんに気が附かなかつたのである。

この女の家の門口りゆうに懸かかっている「御仕立物おん」とお家いえ流りゆうで書いた看板くぐの下を潜くぐって、若い小学教員のちが一人度々出入のちをしていたということが、後のちになつて評判せられた。





日本文学電子図書館

---

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---



日本文学電子図書館